

ノスタルジーでは、 ありません。

京都先端科学大学

川上 浩司

4月から「不利益」の連載を始めています。ここまでの2回は、不便な方が、オヤつと気づいたりフラつと試してみることを許してくれるという話と、自動化機械に勝手にやられるのではなく不便な方式を使えば、自分でやっている感というか、主体性ももてるという話をしました。3回目の今回は、不便な方が安心・信頼できるという話です。

ところで、近頃は、自分の車を持って

車を借りてきました。当時の新車といえ、リモコン式のキーレスキーが主流になっていきます。この学生も、自分のポンコツの挿して捻る式ではなくリモコン式であることを彼女に見せたく、目的地に車を止めてわざわざ車から少し離れてから、リモコンで鍵をかけて見せました。ただ、この時の彼はカッコ悪いことになってしまいます。

私の研究室には、機械工学を勉強してきた者たちが入ってきます。だからドライブに行つた彼も、「制御の組み方によれば、ハザードランプがチカチカしても、ロックされてない可能性がある」とともに気づき、心配になってしまったのです。機械系の性ですね。せっかく離れてから鍵をしてみたのに、またわざわざ

いる大学生がめつきり減りました。昔は、研究室に一人か二人はポンコツですが車を持っていて、夏の研究室旅行などは皆で分乗して海や山に行つたものです。これも遠い日の懐かしい思い出になってしまいました。私が不利益事例を集め始めた25年ぐらい前、ある学生が彼女とドライブすることになりました。

カッコつきたい彼は、自分のポンコツではなく、親父さんが買ったばかりの新

車に近づいてドアノブをガチャガチャさせてロックされていることを確かめずにはいられなかったようです。

彼が言うには、自分のポンコツ車の挿して捻る式のロックは、自分を安心させてくれていたそうです。捻ったときに自分の手に反作用がかかるから、どこかに作用していることがわかる、ドアに近づいてから挿して捻るので、ガシャンという音が4箇所から聞こえて、機械じかけが作動したことがわかる、とのこと。確かに、作用反作用の法則とか、音という物理現象とかは、絶対に裏切らない、信頼するに足るものです。一方、リモコン式でハザードランプが光るのは、人がその仕組みだけであり、物理的因果関係はない、だから安心・信頼できない、と

というのが彼の弁です。なるほど。

挿して捻るといふ動作はリモコンボタンを押すよりもちょっと不便ですが、不便でしか得られない「安心」という益が得られていた、ということです。

後日談ですが、彼の話を聞いてから私自身も、ドアノブをガチャガチャしてロック確認する癖がついてしまいました。あるとき、息子が新車を買ったというので「どれどれ、乗せてみる」という感じで、借りて妻をドライブに連れ出しました。そしていつものように、目的地で車を止めてリモコンでロックした後、ガチャガチャしようとドアノブに近づきました。ただ、この頃の車は、キーレスキーがさらにインテリジェントに進化し

更に後日談です。先の学生や私のような性分の方は案外多いらしく、近頃のスマートキーは近づくだけでは自動解錠しないものが多くなりました。

『ドライブ・マイ・カー』という日本の映画が、長編の(米国にとっては)外国語の映画としては珍しく米国アカデミー賞を取ったと、いま、この原稿を書いている時に世間がざわついていています。私はこの映画を見たことはないのですが、映画の宣伝で紙面を賑わすワンシーンには、なんだかカッコ良い車が登場しています。

なんだかカッコ良いとか、ノスタルジーとかで済ませればいいのに、ついつい「何で、良いのか」の理屈を探し、そ

て、スマートキーと呼ばれるものになっていました。

キーを持っている人が近づくと、勝手にロックを外してくれます。便利です。知的です。メーカーによってはインテリジェントキーと呼ぶ所以です。ただ、私はロックされているかを確認したくてドアに近づいたのです。なのに、ロックは自動で解錠されます。私はもうこれから、インテリジェントキーを信じるしかなく、自分で施錠確認はさせてもらえないのでしょうか。ちよつと途方にくれかけた後、良い手を見つけました。妻にキーを預けて少し遠ざかってもらい、私は手ぶらで近づき、ドアノブをガチャガチャするのです。傍からは間抜けに見えるでしょうが。

の理屈を新しい物事をデザインするときには活かしてみたい、と思ってしまうのが、工学畑の人間の性です。なんだかんだで理屈をつけたがるのです。挿して捻る式のロックがなんだかカッコ良いと感じるのは、私達の安心を、物理法則や物理現象を援用するというスマートな方法で与えてくれるから、だと思っただけです。不利益的には。

できる
安心で



川上浩司(かわかみひろし)

一九六四年生まれ。京都大学工学部、同工学研究科修了。京都大学助教授・特定教授などを経て京都先端科学大学工学部教授。不利益の研究で学会論文賞・出版賞多数。著書に『不利益という発想』(二〇一七) など多数。